

会 報 第17号
2010. 2. 28

発行責任：いわき福音協会広報委員会 ☎0246-23-1903
住 所：福島県いわき市平上平窪字羽黒40-44



カナンの裏の紅梅に雪(村上美好さんの作品)

『賜物をお互いのために役立てるべきである』

ペテロの第二の手紙第4章10節

いわき福音協会理事長 海野 洋

法人の歴史も六十年の歳月を数えるまでになった。紆余曲折のなかで、たくさんの方々に支えられた年月でもあった。

戦後、誰もが貧しく、その

貧しさゆえに福祉は遠くにあがり、特に、偏見のただ中であつた障がい児に豊かな光は当てられなかつた。こうした状況から半世紀が経ち、福祉も時代と共に変わってきた。

さを承知で言えば、福祉はイコールお金の意識となり、こうした関係(施策)が、若者の福祉への心を離れさせないかと心配もある。

私達は、そうならない様に、法人理念の「聖書の信仰に基づいて」とした原点を、確かめながらの働きでありたい。

この原点の最大の目的は、無形の愛を求めた聖書の行いにある。愛も目に見える愛、見えない愛がある。創立者は、この見えない愛にこそ福祉の本質があり、いわき福音協会の働きがあるとして、この条文を定款の冒頭に託した。私達は、法人に身を置く以上、この理念に添って働く責任がある。

さて、今年の標語は「賜物をお互いのために役立てるべき」とした。誰もが、隠れた能力や賜物を持っている。にも関わらず、いろいろな経験がない為に埋もれ、本来の力を出せない方もいる。

そうした能力を生かし、お互いの為に役に立てる様な取り組みをしたい。聖書には「自

分の賜物を働く為に生かそうとするとき、神は最も相応しい働きの方へ導いて下さる」としてある。

その為の業務の評価、或いは施設間の異動によって経験を積む、そうした評価によって処遇やポジションに繋がって行く。最近、人事戦略の一つとして、企業や福祉現場で検討されているキャリアパスがある。こうした評価の利用も視野に入れてみたい。

いづれにしても、地域との共存なしに、この法人存在は有り得なくなつた。

時代は確実に変化を求めており、自分の足下ばかりに、目を向け続けていることは許されない。

数多くの利用者も、地域に生活の場を置く様になり、三十近いグループホーム、ケアホームとなつて生き生きと暮らしている。その為の支援事業も拡大し、その支援拠点も各地域に分散し、職員構成や勤務態様も様々である。気付かないギャップもあり、それゆえに、法人との密接な連携はより必要になる。

目の行き届く組織、或いは、組織運営上からも情報の疎通を図ることは非常に重要である。今後、こうした体制を検討しながらの一年でありたい。

社会福祉法人 いわき福音協会の事業内容

1. 平成21年1月からの動き

- 平成21年1月：就労継続支援B型事業所「かがやき」開所 定員40名
就労継続支援B型事業所「つばさ」は、平成20年12月31日廃止
- 平成21年4月：四施設が新体系に移行 3月末で「つばさ」自立訓練事業を廃止
- 平成21年6月：就労継続A型事業所つばさ 定員10名から20名に変更
- 平成21年10月：はまなす荘の定員(入所支援)を50名に変更
- 平成21年11月：はまなす荘改築の補助事業内示
- 平成21年12月：はまなす荘改築工事請負契約締結。
仮設建物の建設及び既存建物の解体までが今年度の事業。
新築工事は、22年度の事業として継続して行われる。
平成22年11月完成予定。

2. 障害者自立支援法施行に伴う新体系事業への移行計画(2010年)

施設・事業名	新体系の施設・事業名
身体障害者授産施設 カナン村	障害者支援施設 カナン村 事業名(施設入所支援 定員40名) 生活介護 定員40名)
身体障害者療護施設 野の花ホーム	障害者支援施設 野の花ホーム 事業名(施設入所支援 定員50名) 生活介護 定員54名)

知的障害者更生施設 はまなす荘	障害者支援施設 事業名(施設入所支援 定員50名) 生活介護 定員35名 自立訓練 定員18名)
知的障害者更生施設 はまぎく荘	障害者支援施設 事業名(施設入所支援 定員40名) 生活介護 定員40名)

平成22年度移行予定	平成23年度移行予定
知的障害者通勤寮 はまゆう通勤寮	障害福祉サービス事業所 事業名(宿泊型自立訓練 定員20名)

重症心身障害児施設 福島整肢療護園	療養介護 定員40名
----------------------	------------

3. 今後の取り組み(2010年)

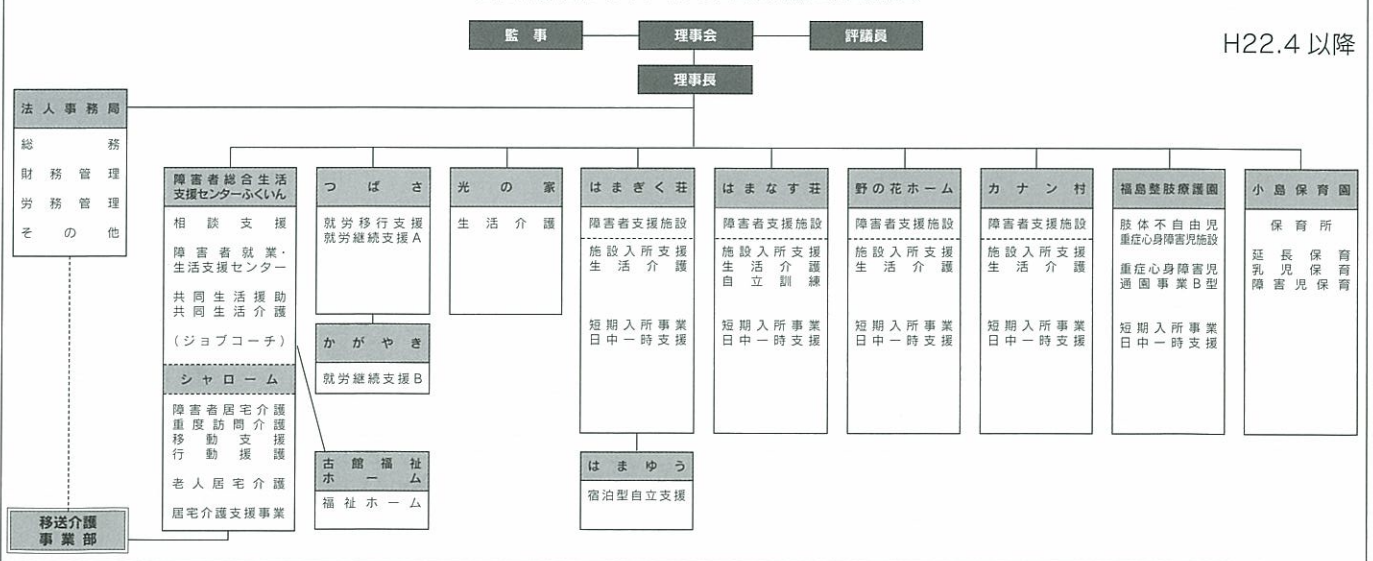
- ① グループホーム・ケアホームの支援体制の整備(サブセンターの設置等)
- ② 日中活動の場の整備

生活介護・就労系の事業所には合わない利用者が地域に不足している。養護学校からも利用希望者が多い。
↓法人として事業所の設置を検討

*施設支援と地域支援、医療と福祉の連携など、利用者への支援体制はもちろん、職員配置等のサービス提供体制についても、施設・事業所単位ではなく、いわき福音協会を一つの事業体として事業を実施することが必要。

社会福祉法人いわき福音協会組織図

H22.4以降



はまなす荘の改築が決まりました!!

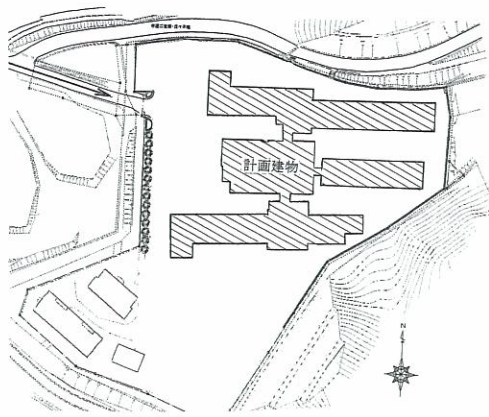
はまなす荘は、地域の親の会の方々の熱意により昭和48年4月に福島県立として設立され、当法人の委託事業として運営してきましたが、平成6年4月に福島県から委譲され法人施設として今日に至っています。

時代の流れと共に生活環境の変化、建物の老朽化等が進み、ぜひ改築をとの声が10年前からあがり検討を重ねてきました。この思いがようやく実り、平成21年度・22年度の2カ年事業として改築の認可が国からおり、いよいよ改築工事が執り行われるようになりました。

今年度は仮設工事・解体工事を実施し、22年度は本体建築工事を行います。現在使用している建物は解体しますので、はまぎく荘のグラウンドに仮設住宅を建て、建物が完成するまで生活します。

4月から新築工事が開始され11月末完成予定です。12月からは新しい建物で生活できますので利用者も期待しています。

はまなす荘改築計画建物配置図



はまなす荘新築建物完成図



建築構造…木造平家建
延床面積…2,593.23㎡
総事業費…710,359千円

内訳 補助金…401,850千円、自己資金…308,509千円

ここに至るまでには、地域住民の方々を含め多くの方々にご支援いただきました。ありがとうございます。今後も更なるご支援ご協力をお願いいたします。

保育所 小島保育園

小島保育園では、地域に開かれた保育園になるべく、「世代間交流事業」を行っています。

大きく分けて二つあります。

一つは、お年寄りとの交流です。「夏祭り」や「運動会」など園の行事に参加してもらったり、園児(年長児)の祖父母とバス遠足を行っています。

核家族、親子のみの関係で生活する家庭が増えていて、園児の人間関係は限られています。このような行事を通して、子どもたちに、自分たちの生活する社会にはいろいろな年代の人が存在しているのだということを知らせたいと思います。

年に数回の交流ではありませんが、子どもたちは、自身の祖父母でなくとも自然と交流が持て、日常関わる保護者や保育士には見せない姿を見せてくれます。それは、わがままな一面だったり、相手をいたわる優しさだったりいろいろですが、通常の保育では、引き出すことのできる大切な一面だと思っています。



もう一つは、同法人内の施設「はまぎく荘」との交流です。

ジャガイモ掘りをしたり、園に遊びに来てもらい、鼓笛隊などを見ていただきます。

年に数回の交流会ですが、このことを通して、子どもたちが障がいを持つ人への理解を深め、大人になった時に、障がいを持つ人たちが地域で生活するよき理解者になれば良いなあと思いながら行っています。

更に、この活動は、保護者の皆様からも支持していただき、交流会という行事を通して、『身近に障がいを持つ人の施設があるということを知った』『幼いときの経験は大事だ』と思うので続けてほしい」というご意見もいただいております。

園では、障がいを持つお子さんの保育も行ってまいります。

地域に根ざした保育園として、地域のいろいろな方々と交流を持ち、子どもたちの社会性を広げていけるよう、また、地域の方々には保育園という存在をご理解いただけるよう努力してまいります。



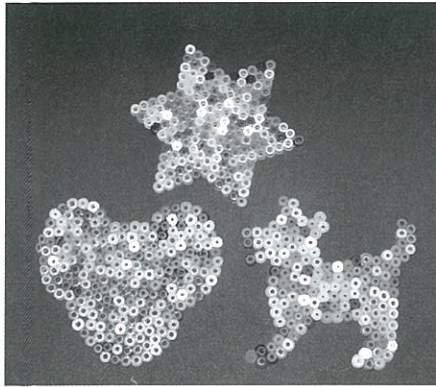
障害者支援施設(旧身体障害者授産施設) カナン村

通所者の受け入れについて

カナン村が新体系へと移行し早くも十カ月が経とうとしています。利用者、職員共に戸惑うことも多々ありましたが、今までとは異なる日常生活にようやく慣れ、毎日を充実した気持ちで過ごしております。

昨年の十一月より、新たに6名の方がカナン村の生活介護を利用することとなりました。

「無事にカナン村の利用者の中に溶けこめるかなあ」と心配でしたが、そんな心配はどこへやら。機能訓練に参加する方も生産活動に参加する方も、あつという間にカナン村の生活に慣れたようで、朝の「おはようございます!」の挨拶から始まり、夕方の「さようなら!」の挨拶まで、皆さんの笑顔がとても素敵です。



ボランティアのお礼

十二月二十日に、染谷さんとそのお仲間の方三名がアンサンブルコンサートに来所されました。カナン村の食堂を会場に、「ジングルベル」や「きよしこの夜」などのお馴染みの曲をはじめ、演歌やテレビ主題歌など、幅広い曲目を演奏して頂きました。

この度は本当にありがとうございました。がとうございました。



平養護学校体験学習

十二月十四日から五日間、平養護学校高等部三年生の方が一名、施設体験実習を行いました。カナン村では生産活動を行なっているということで、生産活動のお手伝いをして頂きました。内容はペットボトルにシールを貼るといふもので、初めての事なので緊張しているかな?と思いましたが、すぐにスムーズに仕事をこなすことができました。卒業後も頑張ってください。

障害者支援施設(旧知的障害者入所更生施設) はまなす荘

クリスマスツリー等が会場内をクリスマス一色に飾りました。

その後、美味しそうな豪華な料理が並び、伊藤昌宏さんの乾杯の挨拶後、各テーブルで利用者さん・招待者の方々・職員が料理を食べながら楽しく歓談する姿が見られました。

続く忘年会では、サンタクロースやトナカイ、クリスマスツリーに扮した職員が登場し、利用者の皆さんが大いに盛り上がりつつ、各テーブルごとにプレゼントを配りました。

その後、カラオケの時間となり、限られた時間内でしたが、利用者の皆さんはそれぞれクラブの時間に練習している成果を発揮し、楽しく上手にカラオケを歌ったり踊りを踊ったりと楽しい時間を過ごしていました。

最後に、自治会役員のお礼の言葉で、盛会に終える事ができました。



平成21年12月23日(水)、日頃、お世話になっておる区長さん始め、多数のご出席頂き、クリスマス・忘年会が開催しました。

例年ですと、報徳苑など、会場を貸しきっての開催でしたが、今年度は、新型インフルエンザ対策という事で、はまなす荘食堂にて開催しました。

利用者・職員によるキャンドルサービスに始まり、職員でメンバー構成された聖歌隊による讃美歌のハーモニーとステンドグラスや利用者さんが日中活動で作った装飾・ク



障害者支援施設(旧知的障害者入所更生施設) はまぎく荘



忘年会

十二月十五日椿山荘にて忘年会。フランス料理風の白い器に洋食、和食の料理が盛り沢山。飲み物もビール、ジュース、ウーロン茶が飲み放題。フォーク、スプーンは苦手だけれどお箸も添えてありました。作業班毎の余興では緊張した面持ちでス

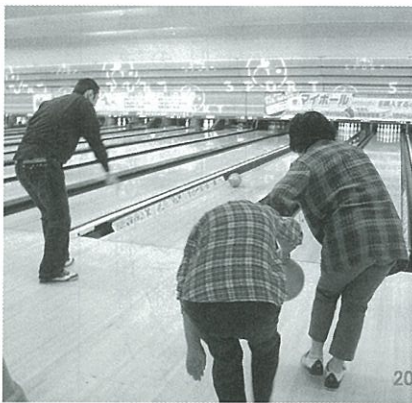


テージへ。あまり練習はできなかつたけれど隣の人の動きを真似て上手にできたと思います。楽しくて美味しい一日でした。

余暇の日 くつろぎ班



施設では「余暇の日」を設けて年に二回、班毎で外出しながら一日楽しく過ごしてきます。今回は「くつろぎ班」を紹介し、ポウリングと美食で評判?の食堂で各自好みの品を注文し美味しくいただきます。料理は熱いうちにと麺も料理もアツアツでした。減塩、ダイエツト食には捉われず味も量も満足でした。ポウリングは練習はほとんどしませんでした。たまたまの外出ですので精いっぱい楽しんだ一日でした。他の班はどうだったかな?



知的障害者通勤寮 はまゆう通勤寮

はまゆう通勤寮は昭和五十七年四月に開所し、これまで二十七年間、入所更生施設や児童養護施設、養護学校等から利用者を受け入れ、生活支援や就労支援を行ってきました。現在も十六名の寮生が入寮しています。

は職員としても大変嬉しい寮生の変化です。これまで保護者の皆様からも「通勤寮に入って変わった。」「表情が良くなった。」「自ら話すようになった。」「といったお言葉をいただきました。

現在の寮生も入寮から一年を迎えようとしています。入寮と共に福祉サービスマスターがやきでの就労を開始し、今日まで就労を継続しています。これは寮生自身の頑張りはもちろんですが、かがやき事業所の職員の皆様のご協力があったことと感謝申し上げます。出勤直後に体調不良を訴え、職員がかがやき事業所に迎えに行き、帰寮すると元気になる寮生の姿を見る度、かがやき事業所とも定期的に連絡会を持ち、支援内容等について検討してきました。「なぜ、誰の為に、何の為に仕事をするのか」「どのように伝えれば寮生に届くのか」と検討を重ね実施した結果、今では毎朝元気な声で「行ってきます。」と出勤し、帰寮時には「ただいま。今日は〇〇の仕事をやってきたよ。」と笑顔で報告してくれる寮生の姿が多く見られるようになりました。また毎月の給料日には満面の笑みで給料袋を手に帰寮する寮生の姿も見られ、寮生の中には自分の欲しい物を買う為に貯金するようになった寮生も居ます。これ

さて、はまゆう通勤寮は二十八年度を迎える今年四月に「障害福祉サービスマスター」と名称も新たに通勤寮支援から「宿泊型自立訓練」に移行することとなりました。支援内容については通勤寮支援をほぼ継承する形となりますが、利用期間が「二年間」に限定されている事業となりません。新体系移行については、昨年末に寮生の保護者様に正式に報告と説明をさせていただきました。移行に伴う不安を無くすことは難しいですが、少しでも不安を減らし、四月の移行に向け、今後も支援内容等については寮生本人と保護者の皆様と検討していきたいと考えています。

写真は昨年十一月に寮生の一泊二日の慰労旅行を実施した際に見学した「東武ワールドスクウェア」の一枚です。



障害者支援施設(旧身体障害者療護施設) 野の花ホーム

潤いのある生活をめざして

「春は名のみ風の寒さや……」「早春賦」の歌詞がピッタリの今日この頃です。ウグイスは何処に……と戸外に目を遣れば、春を待つ落葉樹や常緑樹が、その枝ぶりを誇っています。

野の花ホームは、平成二年四月に県内で三番目の療護施設として開所しました。常時介護を必要とする重度の障害を持つ方々が、家族や生まれた土地を離れて生活することになるわけですから、できるだけ潤いのある日々を過ごしていただきたいとの開所準備に携わった方々の配慮が察せられます。

室内で過ごす事が多い方々のために、各居室から季節の花木が眺められるよう植栽してあります。「その八重桜は私のベッドから見るのが一番綺麗なんだよ」とその時季に皆を自室に招いていた方もおりました。花壇は、車椅子の方でも水遣りや除草など草花の世話がしやすい高さに設置されています。また、天候の良い日には、外に出て自然に親しんでいただけるよう、車椅子でもスムーズに移動できるよう整備しました。そして散策の道すがら花木の名前を覚えられるように名札を付けました。

野の花ホームは、開所して二十年

を経ますが、その間利用者さん、家族の皆さん、ボランティアの方々のご厚意により、建物を飾る花木や花壇は、より充実しています。



生活介護事業所 光の家

厚生労働省が発表する定点医療機関あたりの推定患者数が7週連続で減少を続け、感染拡大がひと段落した感のある新型インフルエンザですが、光の家は新型インフルエンザの感染に戦々恐々としていた一年を過ごしました。

光の家は通所施設であり、日々多数の方の出入りがあることから、感染のリスクが高いと考え、確かな情報の少ない中、できる対策は全て取るうとうと気持ちで早くからいくつかの感染予防対策を取ってきました。

まず、夏場から、スタップのマスク着用、来所される方への手指のアルコール消毒を開始しました。さらに、毎日利用者の帰宅後に床、手すり、椅子などのハイター消毒を実施し、体調不良者が出た場合に備えて個室を準備し、ベッドを設置しました。

また、バスハイク等の施設外での行事は、利用者からの理解を得て中止とさせていただきました。

これらの対策が功を奏してか、現在まで利用者の方々に感染者は出ていません。高い意識で感染予防に努めた結果、スタップも感染することなく毎日のサービスを提供することができているものと思います。

一方で、通常通りの行事を実施することができなくなり、利用者の方々には物足りない印象の一年だった。

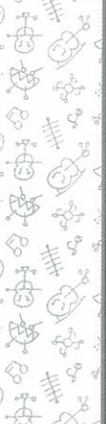
たかもしれませんが。恒例のクリスマス会も、例年のように会場を借り切つての開催は控えざるをえませんでした。が、クリスマス感謝ウィークとして日替わりのイベントとクリスマスケーキ作りを2週間続けて実施し、クリスマスの雰囲気を楽しんでいただくことができました。(写真)



日替わりのイベントは全く新しい試みであったため、スタップも頭を悩ませながら準備を進めることとなりました。が、日々の業務の中で忘れがちなる「利用者の方々に楽しんでいただくこと」を改めて考える良い機会になったように感じました。

利用者の方々の健康に配慮しつつ、楽しい時間を過ごしていただけるよう今後もサービスの提供をしていきたいと思っております。

障害者総合生活支援センター



「ふくいん」にはいわき障害者就業・生活支援センター、相談支援事業所ふくいん、グループホーム・ケアホームバックアップ事業所、ホームヘルプステーション、シャロームの四事業所があり、障がいをお持ちの方や介護が必要な方の地域生活を支援しています。



いわき市障害者就業・生活支援センター

相談支援事業所 ふくいん

相談支援事業所ふくいんは、市から委託を受けている『委託相談支援事業』と、県から指定を受けている『指定相談支援事業』を行っています。指定事業は、市内にお住まいの方で自分ではサービスの調整が難しい方などのサービス利用計画書を作成し、本人さんの希望に添っているか確認しながら関係機関との調整を図っています。委託事業は、市内に6事業所あり、ふくいんは平地区(常磐線から南)を担当です。日々の生活の中で困ったこと、希望などを聞きながら情報提供や関係機関への紹介などを行っています。また自立支援協議会へ課題を上げていくために運営会議、療育支援・権利擁護・精神支援部会へ参加しています。日々

の相談で「こんなサービスがあったらいいな」と思われる社会資源の開発に向けて皆さんと意見交換し、障がいを持つている皆さんが地域で自分らしい暮らしができるように、これからもともに歩んでいきたいと思っています。

いわき市障害者就業・生活支援センター

当センター業務については、これまでお伝えしてきましたが、今年度はスタッフも増員になり、年々増え続けている登録者の方への支援内容もより細やかになりました。

就労面に関しては、経済状況の悪化により企業の縮小及び閉鎖により離職を余儀なくされた方が増えており、就職先が見つかるまで就労移行支援事業所、就労継続B型事業所の利用を進めています。定員等の関係から希望者が必ずしも利用できる状況ではないとの現実問題があり、関係機関の協力を委ねている状況です。

また、平成二十一年度障がい者委託訓練事業を受け、障がい者IT講習会を開催し、七名の受講者が三ヶ月間の講習を無事終了しました。受講者の方々が今後何らかの形で経験を活かす事が出来る事を願っております。これからもスタッフ一同明るく楽しく協力し、支援をしていきたいと思っております。

**働きたい・地域で生活したい
あなたの夢を応援します！**

福祉サービス事業所 つばさ・かがやき



福祉サービス事業所「かがやき」は平成二十一年一月に開所した、就労継続支援B型の施設で、現在、利用者四十八名、職員十六名で活動しています。

め作業と、いわき市の敬老記念品作りを行っています。流れ作業の中で、個々が不良品を出さないよう日々頑張っています。

開所から一年、これからも『笑顔の絶えない、かがやく施設』として活動していきたいと思えます。

環境整備班の作業は、一般家庭のお庭のお手入れ(除草・剪定・窓ふき等)、施設の清掃・ワックス掛けを主に行っています。丁寧な作業ぶりが好評で、おかげさまでご依頼が絶えません。

農耕・園芸班の作業は、野菜・花の生産・販売、稲作、野菜の加工品(漬け物・切り干し大根)の生産・販売を行っています。新鮮な野菜は、施設周辺の皆様の評判になっていきます。

室内作業班の作業は、地元のゴム工場からの委託で、輪ゴムの箱詰



環境整備班の作業



農耕・園芸班の作業



室内作業班の作業



肢体不自由児施設 重症心身障害児施設
福島整肢療護園

身体拘束ゼロへ向けて
 の取組み

事務長 松本 裕一

「拘束」という言葉の響きが決して良いイメージを持たない事は、何も福祉や医療に携わる人に限定された事ではない。平成12年に介護保険がスタートし、老人介護分野で様々な議論が展開された事を契機に、他の医療や福祉の分野でもこの「拘束」をなくす取組みが徐々に展開されてきました。

当園のような児童福祉施設と病院機能を持つ領域では、何をもちて拘束と捕えるのかの判断が難しい面もあり、施設全体の共通認識は統一されていませんでしたが、平成20年11月より「身体拘束ゼロ委員会」を立ち上げ、本格的に拘束ゼロを目指す取組みがスタートしました。

当園は、児童福祉施設であると共に病院としての役割を果たすため、どうしても避けられない「命を守る」使命を持っていきます。故に、当人の健康状態を維持する点滴や注入等の医療上必要な処置や管理も日常的に出て参りますし、障害特性上座位をとれない方のための椅子である「座位保持装置」に座る事も、ごく当たり前の事として捉えて参りました。しかしながら、これら医療上或いは日常生活を送る上で不可欠とされているごく当たり前の事でも必要以上に制約が出たりすると、「拘束」

に繋がる恐れが出てきます。

そこで委員会の立ち上げを契機に、各病棟の師長や委員を中心に、「拘束」に繋がる環境や行為がないかを改めて検証する事から取組みがスタートしました。点滴チューブの自己抜去を防ぐ為のミトン手袋はいかにせずせるか、また必要以上に座位保持装置に座らせない工夫等、ひとりひとりの生活環境の見直しをする事で、スタッフ間にも徐々に意識の変化がみられてきました。ある意味ではこの事が非常に重要であり、新たな視点を持つ意味でこの委員会を立ち上げた意義は大きなものがあつたと言えます。

一方、ハード面での改善に心強い援護もありました。昨年12月に福島県信用組合協会様より「ジョイントマット・ベンチ一式」が寄贈され、重心病棟で利用者の方のフリーな時間を過ごす活動に大きな役割を果たしております。

道半ばであるこの取組みが、今後も検討を重ねながら常にスタッフの意識の中に浸透しつつ、より良い生活環境を提供出来るようスタッフ一同この取組みを継続していきたいと考えております。



おめでとうございます

昨年11月5日、東京グランドプリンスホテル高輪貴賓館にて、常陸宮・同妃殿下、厚生労働省・文部科学省・肢体不自由児協会の方々のご臨席のもとに第43回「ねむの木賞」の贈呈式がおこなれ、福島整肢療護園の星邦子総看護師長が授与されました。また、贈呈式の後皇居に参殿してご接見の栄と皇后陛下から励ましのお言葉を賜りました。

星総看護師長は、昭和63年2月に当法人の職員として採用され、現在まで福島整肢療護園で永年にわたり看護師として働き、肢体不自由児・重症心身障害児と寝食を共にしながら指導にあたってきました。この功績が認められ全国で4名の方々の一人に選ばれました。当法人としても大変名誉なことで、誠にありがとうございます。



*ねむの木賞とは、「ねむの木の子守歌」の歌詞著作権を肢体不自由児事業振興のために下賜された皇后陛下の御意志を永く記念するため、昭和42年に設けられたもので、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設、特別支援学校等において永年勤続し、障害児・者の日常生活指導などに携わり、優秀な成績をおさめている方に対してその労をねぎらい、また、今後の益々の活躍を期待して毎年授与しているものです。



新しい年が明け、福祉の世界もまた制度が変わる動きがでています。しかし、いかに変わろうとも私たちは福祉の原点に立ち邁進していきたいと思えます。

今年もご指導とご支援をどうぞよろしくお願いいたします。